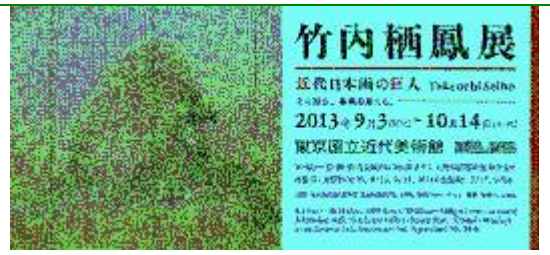
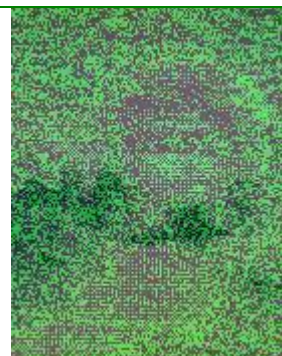




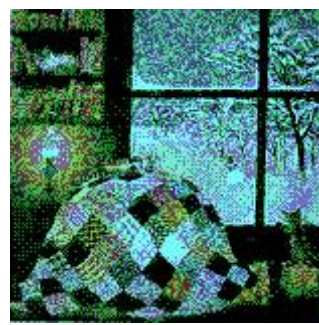
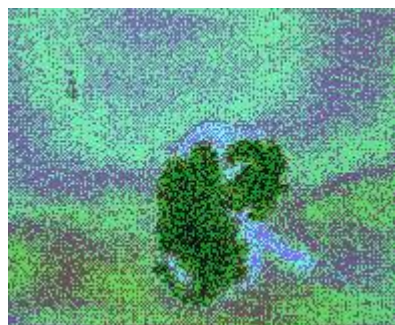
2013年9月16日(月祝) 我ら猫族が描かれている「竹内栖鳳展」を観に、従兄の三毛乱治郎と東京国立近代美術館へ行ってきました。西洋の日本画は大好きです。9月3日(火)~23日(月祝)までの前期は虎とライオンが、9月25日(水)~10月14日(日)の後期には猫が登場します。猛獣の迫力もさることながら、後期が楽しみです。



- 竹内栖鳳(1864.12.20~1942.8.23) 京都画壇の大家。狩野派を始めとする様々な流派を取り入れたばかりでなく、西洋の画法も取り入れた。初期のころの雅号の文字は「棲鳳」 雪舟の絵の模写などに励んで腕を磨いた。「雀の栖鳳」と言われ、雀の生態を細かく観察したことについては、自身も自信を持っていた。雀を描いた屏風では、一つとして同じポーズのない雀たちが生き生きと遊んでいる。
- 「多くの画家は線をもって輪郭を描こうとするが、もし画家がその形を掴んでいるなら線があってもなくても藝術としての輪郭はできる」という言は、西洋画のスフマートにも通じる。栖鳳は万博視察のために向かったパリで、日本にはいない猛獣に興味を抱き、スケッチするために動物園に何度も足を運んだ。自宅には猿、兎を始め、多くの動物たちを飼った。シャモの喧嘩をスケッチするために近づきすぎてつかれたというエピソードも残っている。「皆、兎は丸まっているものだと思っているが、食後にのんびりしているときは伸びていたりする」というように、それぞれの動物たちの状況による変化を実に綿密に捉え、様々なポーズを描いた。
- 「パリで見学した裸体画を日本でも描いてみたい」と裸体モデルを依頼したもの、急遽代理モデルとなった若い娘の恥じらいを考慮して着物で覆う形で描いた。また東本願寺の天井画製作に天女を描くにあたってのデッサンは裸体であり、天女は衣服の中の人体の形に沿った表現となっている。そのようにして「西洋画を水墨画で表現してきた」栖鳳であったが、大正時代には日本画の技法に戻り「画面に最小限のものを描く」 昭和に入ると形の単純化を目指し、最低限の線で描くためにスケッチ帳には輪郭しか描いていない。「最低限の線で描くには十分な写生が必要である」
- 栖鳳は遠景に高い塔がそびえる景色が好きで、その景色を観るために1920(大正9)年の4月、初めて念願の中国を訪れた。そして中国に似ている潮来の景色を好んだ。
- 栖鳳は俳句をたしなんだが、「月並みでは面白くない」と同じ画面に夏と秋の季語を入れたりした。
- 栖鳳は道具にこだわった。必要な滲みを出すために最適な紙質を選び、鳥の羽は太筆で大胆なタッチで描き、木の枝は細筆で繊細に描く、というように用途に合わせて道具を使い分けた。墨は静かにゆっくり摺った方が伸びが良いため、若い娘に摺らせるのが良いとした。余談であるが、ケーキの生地も、ゆっくり静かに攪拌した方がきめが細くなる。そのこだわりは表現したい彫刻のために石の材質にこだわったミケランジェロのようである。偉大なる芸術家は生涯新しいことに挑戦し続けた。



左：栖鳳が好んだコロニーのように描いた「ベニスの月」



右：デフォルメされながらも自然に見える「斑猫」 「竹内栖鳳展」の後にいった「藤城清治展」の影絵。窓から外を覗く猫の姿がリアルな「こたつと猫」

- この日は二つの展覧会を観たが、竹内栖鳳氏と藤城清治氏の「生き物観察眼」に共通点を見出した。画面の中から息吹が、音が聞こえてくるようである。それは本質を捉える目が捕まえた真実である。それが「生きている絵」であり、心に響き、あるいは静かに浸透する絵だと思う。(2013.9.17記)